

第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップにおける 「“ゆたかなくらし”の新しいすがた」の試み

～撮影・ライブ配信スタッフとして運営に携わった立場から～

橘 和徳（富山県立富山中部高等学校教諭、富山県フットサル連盟 理事）



今大会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、「無観客試合（大会関係者、選手・チームスタッフ以外の入場制限）」で実施されました。現在、全国的にスポーツ大会で取られている措置ではありませんが、「大会での我が子の雄姿を現地に行って見たい」というのが保護者の皆さんの切実な思いであるのは、日を見るより明かです。

そこで、2020年7月～8月に開催された「TOYAMA2020 高等学校スポーツ交流大会サッカー競技」において試合のライブ配信に携わった経験から、今大会での試合の映像配信のお手伝いができればと考え、撮影担当として参加させていただきました。しかし、ライブ配信に関する知識はほとんどなく、どのようなクオリティで行えるかは未知な部分でしたが、とにかく「選手のため、保護者のためにやらなくては」という思いで携わらせていただきました。

<ライブ配信について>

0 動機・目的

大会規定により、会場に来られない保護者の方、チーム関係者に向けて、ライブでの映像配信を行い、「応援を代償すること」を目的としました。この大会は、将来のフットサル日本代表選手やフリーガーになるかもしれないという有望な選手も出場するということで、その価値、そして映像の価値は高いと考えられます。価値ある映像をより多くの方へ向けて公に発信するということも検討されましたが、クリアすべき課題がいくつかあるということ、大会までに準備時間がほとんどない（配信スタッフのミーティングは12月26日にオンラインにて初めて行いました！）ことから、今回は肖像権の保護を重視して公に配信することはしないこととなりました。

1 使用アプリケーション

今回のライブ配信には、様々な可能性を検討したところ、テレビ・Web会議ツール【Zoom】を使用し、「限定的な配信」にするということで準備が進められました。Zoomの利用の仕方についてはオンライン授業等でアプリの使用に長けている大学生（筑波大学附属高校出身）のお二人に検討していただき、中塚理事長、本多副理事長を含む運営担当で様々な想定（視聴希望者の数、視聴範囲、ニーズなど）をした上で、通常の有料版ライセンスを2つ用いて、ピッチごとに配信することとなりました。

詳しくは後述しますが、メインセッションに視聴者が入室されたのち、事前登録された方かどうかを配信スタッフ（現地2名、リモートスタッフ5名）でチェックし、ブレイクアウトセッションへ移動させるという方式を採用しました。

2 使用機器

1) 配信用PC・タブレット

当初は、私の持参する「dynabook（東芝製、Windows10 PC）」と「MacBook Air（13-inch, 2017）」を用いて試合映像の配信用アカウントを使用する予定でしたが、私が操作するMacBook Airのみの稼働となりました。理由は、配信画像の不鮮明さを解消するために（実際の原因はWi-Fiであると考えられ、解消しなかったのですが）、ビデオカメラを使用した配信を諦め、私の持参した「iPad Air 2」を使用した配信に切り替えたためです。

2) HDMIキャプチャード

[Digizo PCA-GHDAV（プリストン）]

ビデオカメラで撮影（実際は記録していないのですが）した映像を、上記の図のように「HDMIキャプチャード」という機器を通してPCに取り込み、Zoomの画面に映し出しました。

動画配信接続イメージ

カメラによるLive配信



3) デジタルビデオカメラ

デジタルビデオカメラ 2 台 (SONY 製、CANON 製) を使用しました。ビデオカメラでの記録はせずに、キャプチャーボードを通して映像を Zoom に送るという役割のみを担いました。

4) 三脚

デジタルビデオカメラ用に【SLIK /GX6400】を使用しました。安定感があり、撮影に支障はありませんでした。しかし、iPad を使用した方は、【サワダ外/タブレット三脚固定ホルダー-200-CAM030】を使用した際に、固定が甘く、撮影に支障が出てしまい、視聴者からご指摘がありました。(撮影者は急遽ボランティアをお願いした方でしたので、固定の仕方をお伝えできず、対応できませんでした。)

3 スタッフ配置

1) 現地スタッフ

現地でのライブ配信専属スタッフは、サロンから私を含めて 3 名しか確保できず、撮影 & Zoom 管理の「2 ペア 4 名」を実現できませんでした。このことにより、初日の機器の設置に手間取ってしまったこと、撮影を高校生にお願いした A ピッチについては実況による状況伝達がうまくできなかったこと (当初行う予定ではありませんでした)、そもそも休憩等の時間を確保できなかったことなどの課題が挙げられました。

2) リモートスタッフ

Zoom での視聴者管理を右の図のように行いました。まず、試合のライブ映像を見られる Zoom の「メインセッション」にチーム代表に事前にお伝えしていた URL などから自力で到達していただき、そののちに、Zoom 管理スタッフが事前に提出していただいた視聴者リストと照合し、「ブレイクアウトセッション」に移動していただくという方法でした。この作業は、「ホスト (Zoom 会議の主催者)」または「共同ホスト (主催者に任命された人)」が行う権限を有することとなり、現地にいなくても行うことができるため、現地に

いないサロンメンバーの方々計 7 名にお手伝いいただきました。実際には、試合開始 15 分前から試合開始 5 分後あたりまでに視聴者の方々は入室していただくことができ、リモートスタッフの皆さんにしっかりとご対応いただいたので、入室に関する苦情等はほとんどありませんでした。

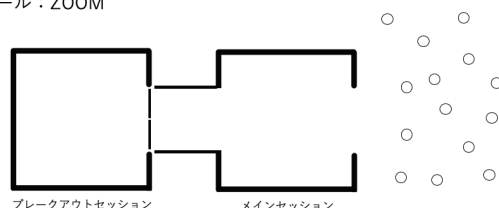
4 今回のライブ配信の問題点

1) 画質・音質の悪さ

今回の配信は、海外旅行時などに契約されるなどでお馴染みの【ポケット Wi-Fi (SOFTBANK の電波を利用するもの)】を使用しましたが、体育館における通信環境が悪く、配信される映像の画質は低く、音声情報も途切れ途切れになることがほとんどでした。選手の背番号もほとんどわからず、「瞬間移動」しているように見えることがしばしばあるほどでした。

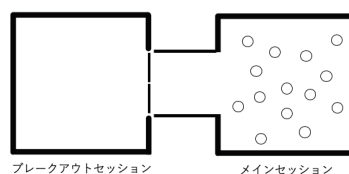
配信方法

使用ツール：ZOOM



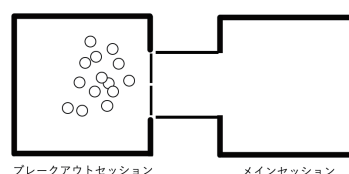
配信方法

使用ツール：ZOOM



配信方法

使用ツール：ZOOM

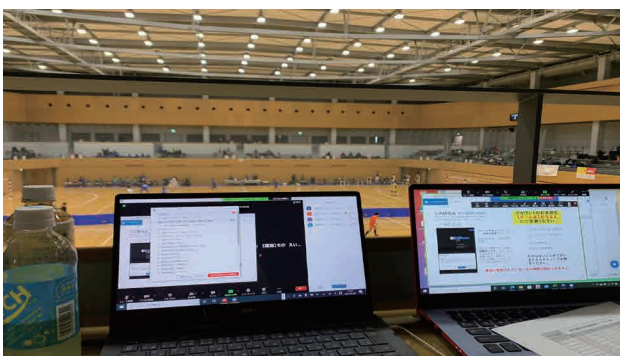




2) スタッフの連携

撮影スタッフに関しては、そもそもピッチごとの専属が確保できなかったこと、撮影マニュアル（音声での実況含む）などが存在しなかったことなど、撮影者の力量に頼ってしまうものとなりました。また、画面上に試合時間や得点経過を表示できるような仕組みができれば、映像としてさらに改善されると思いました。また、現地の臨場感をお伝えするために、フットサルに関する技術的・戦術的知識を有している撮影スタッフであることが望ましいと感じました。

リモートスタッフに関しては、ブレイクアウトセッションへの入室の許可基準（チーム名とフルネームの表示）のスタッフ間による認識の曖昧さが生まれてしまい、Zoom 以外の連絡ツール（メッセージャー、LINE など）の構築による、視聴者とは別次元での連絡手段が必要であると感じました。（実際にはメッセージャーのグループトークを利用しました。）



現地 Zoom 管理スタッフの視点

5 今後のライブ配信の可能性について

● より広い視聴者への配信の可能性

冒頭に述べましたように、この大会のライブ配信は、コンテンツとしての価値は高いと考えられます。それを世の中に向けて発信するということは、大会の価値をさらに高め、フットサル・スポーツの価値を高める

ことにもつながり、“ゆたかな暮らし”を築いていく上で大きな意味をもつと思います。しかし、クリアすべき課題はいくつも（肖像権の問題、スポーツが切り取られることの問題、審判や選手への誹謗中傷の問題など）あり、今後、様々なメンバーの意見を伺って、より良いものにしていくことが求められます。

● より幅広いコンテンツの配信

今大会での配信対象は、「試合のみ」としていたため、保護者の方が観たいと思うであろう、「表彰式」や「試合後のインタビュー」などという部分にまでは踏み込めませんでした。決勝戦終了後に表彰式が行われ、急遽ライブ配信はカメラ固定で表彰の場所を映すようにしましたが、視聴者の方の満足していただける画角にはなっていなかったと思います。また、試合については、実況内容をよりわかりやすいものとするために、原稿の事前準備をすること、フットサルに関する知識のあるスタッフの活用などが考えられました。さらには、双方向性のある「応援が届く仕組み」も作ることができれば、より楽しんでいただけるライブ配信になるということも考えられました。

● 様々なスタッフと作り上げる配信に

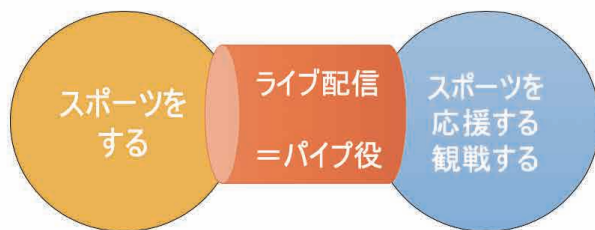
大会自体は「参加する高校生が作り上げる」という理念のもと開催されています。高校生の無限の可能性を広げるために、配信を参加チームの選手や、地元の高校の放送部や情報系の生徒に依頼するなど、このこと自体を「スポーツを支える」という観点で広げられるのではないかと考えられました。高校生が難しければ、大学生などのスタッフを開拓していくことも一つの手であるという意見もありました。

6 全体を通して

私自身、高校サッカー部の監督として 2020 年度はコロナ禍での大会をいくつか経験してきた中で、「スポーツを、大会を支えてくださっている方への感謝」というものを身に沁みて感じてきた 1 年でした。スポーツを「する」人々が、スポーツを「支える」人々への感謝の気持ちをもって、精一杯プレーする。その精一杯のプレーに観客や支える側は感動をもらい、「また支えたい」という気持ちが湧いてくる。そんなスポーツの本来あるべき形を【ライブ配信】は実感させてくれる存在ではないかと感じました。すなわち、する側の「やりたいし、やるからには一生懸命やりたいし、

せっかくなら観てもらいたい」、観る側は「一生懸命やっている人を応援したい」という With/After コロナの「ゆたかな”あり方”」を実現させるために双方を繋いでいくパイプ役になりうると感じました。

今大会のライブ配信自体は拙いもので、ご迷惑をおかけしましたが、視聴していただいた保護者の皆さんも、決勝戦になる頃には慣れてこられたようで、チャット欄に、「ライブ配信ありがとうございました。」「音声を入れていただき、わかりやすかったです。」などと、労いの言葉もいただき、大変うれしかったです。感謝されたいと思ってやったわけではありませんが、この言葉のおかげで2日間で計19試合の配信をやり終えて疲れ切った体に、少し力がみなぎりました。様々な課題は挙げられるのですが、今後に繋がる第一歩であったかなと思っています。ご協力いただきました皆様、視聴いただいた皆様、ありがとうございました。



都下の少年サッカーの「With/Afterコロナ」

熊谷 建志 (FC城東(東京都少年サッカー連盟所属・江東区)代表)



新型コロナウイルスの対策に追われサッカーとしてのシーズンは短かった 2020 年ですが、チームを運営する立場としては随分と長く感じられた 1 年でした。

この原稿は 2021 年 1 月に再発令された緊急事態宣言によりチーム活動が中断している間に書いています。しばらく続くであろうこの状況について、第 4 種のチーム運営においてこれまで対応してきたことを振り返りたく思います。

当チームについて

当チームはいわゆる「サッカー少年団」。地域の学校グラウンドで練習し、OB や選手のパパがコーチとして指導し、保護者が当番活動で協力しながら運営するチームです。園児年中から小学 6 年生まで約 100 名の部員が在籍します。専門の指導者やスタッフはいないため、土日祝日を練習日とし、区内の地域大会を中心に参加するという活動範囲となります。

チーム代表である私自身も長男の入部と合わせてパパ審判として関わり始め、4 年前から区連盟の理事としても活動しています。

緊急事態宣言発令 (2020 年 4 月) までの対応

五輪イヤーとして新年を迎えた 2020 年初頭は卒団する 6 年生部員の送別会準備や次年度の活動計画に入っていました。しかし 2020 年 2 月 27 日の政府による全国小中高校の臨時休校要請により学校施設貸出が停止となり、都内の多くのチームと同様、活動を停止せざるを得ない状況となりました。

ここで露呈したチーム運営の課題は、そもそも危機管理体制がないため、チームは何に対してどのように動くべきかという基準もなく、その同意が取れる術がないことでした。運営体制は上記の通り部員の保護者など中心に組織されていますが、私がその代表だから

といっても全てを決める専権があるわけではありません。私自身専門外である感染症という未知の分野の対応の知見もありません。とはいえ少額ながらも活動費を集めて活動しているので運営責任はあります。

地域の小さなチームとはいえ、活動に関わる指導者・保護者との間で情報と方向性を共有する体制が最初からないと、判断が間違ったときに取り戻すことの時間と労力が非常に大きくなることは、普通の会社員としての業務の中でも覚えにあることなので、最低限の危機管理体制をまず引き、必要な知見を集めることに取り組みました。

チーム内の各種連絡は、数年前よりグループウェア機能があるスマホ対応された SNS サービス「BAND」を活用していました（「LINE」と同じ韓国 Naver 社のサービス。ちなみに私が入る数年前までは連絡網で電話連絡していたらしい）。その中で「危機管理委員会」として任意で情報提供や意見だしをしたいメンバーを募ったところ、約 30 名の指導者・保護者が集まってくれました。チーム内には医療機関従事者、学校 PTA 関係者、サッカー連盟関係に接点がある保護者などがおり、現在に至るまでチーム活動の方針や具体的な計画について確認するための活動基盤としております。

今回のコロナ禍においては、ビデオ会議、チャット、SNS など様々なコミュニケーション手段が普段の活動に対する代替手段となり得ましたが、これがない時代にコロナ禍を迎えた場合、その労力はどれほどのものとなるのか想像もできません。

緊急事態宣言発令 (2020 年 4 月) から チーム活動再開まで

4 月 7 日に東京都など 7 都府県に緊急事態宣言が発令（のち全国に拡大）されると、小中学校の休校期間も延長となり、不要不急の外出が制限されるほぼ完全な活動停止状態となりました。

このころには既に先ほどの「危機管理委員会」において活動休止および再開に関する対策方針が固まり、グラウンド利用が再開して活動できるようになって「警戒期間」として任意参加期間を設けるなどの基本方針を出すことができました。その後 JFA および東京都サッカー協会からも明確に連盟所属チームにおける活動指針が提示されるようになり、それに従った再開計画を立てられるようになりました。

チームでは例年 5 月に年次総会も行っていますが、これも初めてオンライン開催とすることにより、試合計画や予算計画を含む活動方針を共有することもできました。

その緊急事態制限は 5 月 25 日には解除され、小中学校登校も 6 月から再開されましたが、江東区の教育委員会は再開に慎重な対応を敷いていてことから、学校グラウンドの貸出は 8 月 8 日まで再開できない状況でした。川を渡った隣の区のチームは練習している、周辺にたくさんある区営野球場では少年野球している、という中、自分たちの練習ができない選手・保護者にとっては随分フラストレーションが溜まる時期だったと思います。

これは同じ区内のサッカーチームも同様の状況でしたので、区のサッカー連盟と調整したグラウンドで短時間の全体練習を行いながら、個人練習として周辺の河川敷などでボールを使わずランニングするなどの対応が続きしました。

本格的に活動再開できたのは結局 8 月 8 日から。本来 8 月は熱中症対策のため活動していない期間でしたが、実家への帰省を避けた人が多かったことと、冷夏だったことが幸いし、公式試合開始となる 9 月になんとか間に合わせた状況でした。

活動休止の影響

ところで当の選手は長い休止期間においてどのような状況であったか、再開時の 7 月に在籍部員の保護者を対象にオンラインでアンケートを実施しています。そこからいろいろな発見がありました。

・個人練習（図 1）

約 3 ヶ月の活動休止中における個人練習の頻度を確認しました。グラフの左から右へ練習回数が増える形で集計をしています。

選手間に競争があるクラブチームと異なり、任意での活動を推奨した当チームでは、個人の意欲もしくは選手の生活環境によりばらつきがみられました。

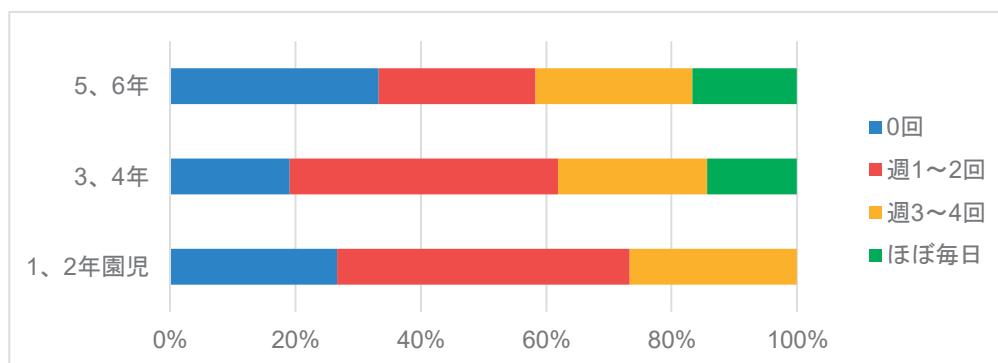
江東区内はサッカーボールを持ち込める空き地や公園も少なく、2 年生以下の低学年は週 1 ～ 2 回以内の回答が 6 割以上という状況でした。

・モチベーション（図 2）

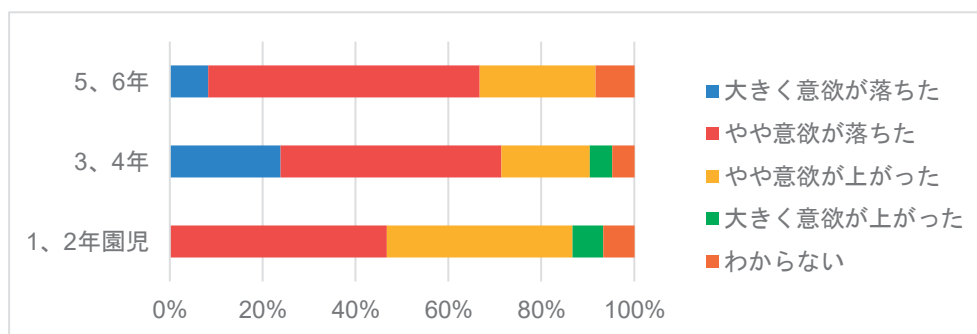
休止期間解除直後のモチベーションを保護者視点で確認しました。同じくグラフの左から右へモチベーションが高くなる形で集計をしています。

■FC城東における新型コロナウイルス緊急事態宣言後の活動再開(2020年7月)時の意識調査
回収方法: オンラインでフォームからの任意回答
対象: 在籍部員保護者
回答数: 48件

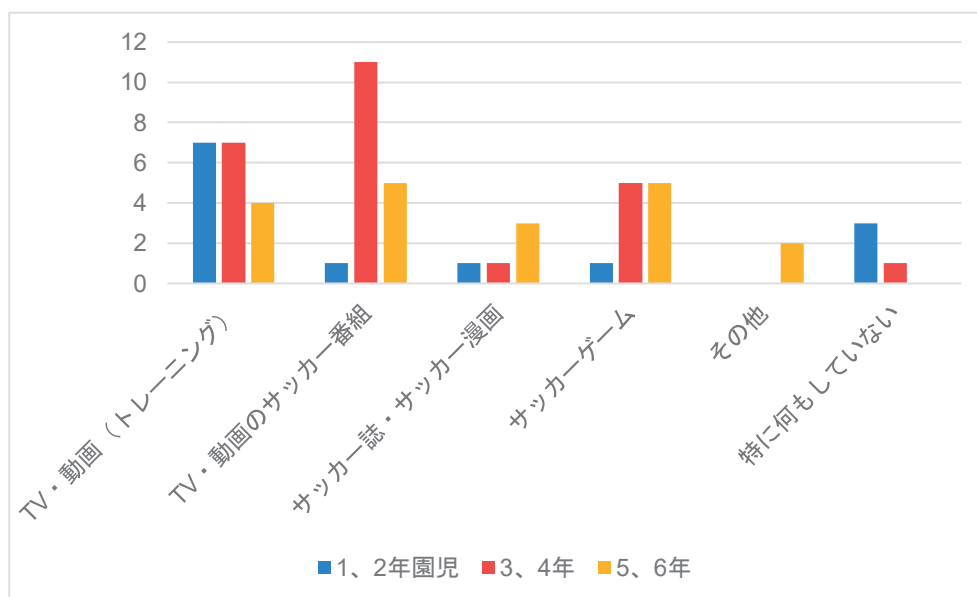
●図1: 活動休止期間(2020年4月～6月)における個人練習



● 図2: 選手の現在(2020年7月)のモチベーション



● 図3: 活動休止期間(4~5月)のサッカーの接点 (※複数回答)



2年以下は再開後サッカーができることから「やや意欲が上がった」の回答だったのかもしれませんが、3年以上に意欲低下の回答数が多いことを見ると、長期活動停止による心理的な影響が強かったことが伺えます。5、6年に比べて3、4年に大きな落ち込みがあるのは、目的が確立し出す5、6年に比べて意欲を持続けることが難しい年代的な傾向があるように伺えました。

・サッカーの接点(図3)

複数回答可として、休止期間にサッカーとどのような接点を保ったか確認しました。

体動かせない期間に使用したサッカーとの接点を保つツールは、TV・動画が一番活用されています。

設問を「TV・動画」と一緒にしてしまいましたが、特にトレーニングについてはインターネット動画の比率が大きかったと想像します。

学年別でみると「TV・動画(トレーニング)」は3

年生以上より1、2年の方が回答比率が多くみられますが、おそらく「保護者が選手に見せる」年代と、「選手自身が見る」年代の違いかと想像します。それは3年以上になると「サッカーゲーム」や「サッカー誌・サッカー漫画」など選手自身で楽しめるツールへの回答比率が高いことから伺えます。

必要な「変化」

長い休止期間により「これまでの活動」を継続することに影響があったことは確かでしたが、それが全て悪いことばかりではありませんでした。よくよく見ると「これまでの活動」は見直さないといけないこともありました。

チームにはクラブハウスなど専有できる施設がないので、現在も保護者当番により活動学年ごとに備品管理を回しています。ただ「接触を避ける」という観点で見ると、共有が不要なものはたくさんありました。

共有備品だったビブスは個人への貸出とし、コロナ対応で新たに必要となった消毒液はチーム代表が一括で在庫管理する、などの対応をしました。

またチームの入会書類なども、書面を印刷して捺印したものを提出する、など慣例化された手続きが残っていました。リモートのままでも手続きが完了できるようにオンライン申込書による手続きへ変更し、記入頂いた日時と登録先メールアドレスへの自動返信により承認頂いたとみなす、という方式に切り替えました。これまで紙に記入された住所情報を Excel へ手入力していた労力が減り、ペーパーレス化により書面を保管する必要もなくなりました。

保護者は全員スマホ持ちなので、接触通知アプリの導入も促しました。毎回の練習前に体温登録するサイトも作り、スマホのおかげで簡単に登録できます。

活動費の集金や少額のチーム経費の決済もオンライン化できないか、など検討したい事項はまだあります。また区や学校に提出する施設使用申請も FAX や紙はなくなれないか、など外部にも期待したいこともあります。

小さな地域団体でも使える「無償」「セキュア」「効率的」な方法、つまりデジタル化できることはまだまだあるような気がします。

今後の課題と活動

新型コロナウイルスの収束は現在のワクチンの提供見込みから見て 2021 年中に解消できるとはとても思えず、当面は活動停止と再開の繰り返しとなることを覚悟しています。その環境下における選手たちの成長をどのように支えるかは、指導者と保護者との継続的な知恵の出どころだと思います。

1 点、運営の立場としては、チームが持続的に活動できるようにするためには、選手を支える指導者・保護者同志のコミュニケーションを如何に維持できるかが課題と考えています。少年団の運営は指導者も運営者も参加者も同じ組織として活動する「責任共有」のモデルであり、「お金を出しサービスを受ける」受益者とその供給者に境界線があるモデルではありません。少年団サッカーへの参加を「子供の遊び場」に留まらない「大人のコミュニティ」として盛り上げることで、これまでも指導者・審判員・その他試合やチーム事務に意欲的に携わる方々を増やすことができました。この部分は現在のチームのポリシーとも言え、たとえ東京都一番の強豪チームとなれなくても、江東

区北部の子供にサッカーに触れる機会を作り続けるための基盤になっていると思います。そしてそれはこれから新たにサッカーを始めたい子供のためにも、今後も続けるべきと考えています。

現在のコロナ対策は医療面と合わせて経済面の対策も重要です。コミュニティに参画する大人が個人的に難しい状況下となっても、サッカーとその環境で何か支えになることができるか、臆気ではありますがいろいろ思いめぐらすところがあります。

最後に：2020 年シンポジウムを通して

話を 2020 年度のシンポジウムに参加した感想に切り替えます。

個人的にはリモート旅行などの「体験」をどのように個人体験として回収するか、に興味がありました。

それは先のアンケートにおける「モチベーション」や「サッカーの接点」から見えてきたものにも通じています。

例えば最近人気の TV 番組「逃走中」ですが、90 年代にも「街を舞台とした鬼ごっこ」のような番組がありました。最近人気が再燃したのは、高画質で軽量かつネット接続できるカメラなど技術的な進化により、逃走者とハンター双方の視点のリアリティのある映像により高い演出ができるようになったことかと思います。周囲の小学生の間で大人気です。

そして実際近所の小学校では 6 年生の修学旅行ができない代わりに学校内のイベントとして「逃走中」を保護者と生徒で行ったそうです。高額な配信機器なくても TV 番組と同じことができ、その配信映像も iPad で見ることができます。

私個人も旅行好きながら、コロナ禍により外出できない状況にあります。ただリモートワークとして自宅で仕事する環境になると、居間にある Amazon Alexa を使い海外のラジオを BGM 代わりに聞く、というようなことができるようになりました。私のチーム同様、私自身も環境が変わることで見つかる副産物がいろいろなところにあることがわかりました。

現在の感染症の災禍の解消までは数年かかることと思いますが、いつかここで新たに得た体験がリアルとして回収できる機会を待ち続けたいと思います。

コロナ禍における競技かるた

～部活動を取り巻く現状と課題～

由井 一成（学習院大学 非常勤講師／元神奈川県高等学校文化連盟かるた専門部幹事）



「常識を疑え」

これは2021年1月16日に開催された「オンラインリアル脱出ゲーム大パーティー」の開会宣言において、主催者である株式会社SCRAPの代表、加藤隆生氏が述べた言葉である。端的でありながら極めて示唆に富んだ言葉であった。

2020年はまさに常識が常識として通用しなくなってしまった年であった。つい先日まで、人前で話す際には「マスクを外せ」と厳しく言われてきたものである。それが今や真逆といっても過言ではない。外に出る際には服を着るがごとく顔をマスクで覆うことが、そして発声の際には口や鼻を隠すことが「常識」となってしまった。あらゆる場面で「常識を疑う」ことが新しい生活様式においては不可欠となった。

実はこの「常識を疑う」という行動こそが、部活動の世界において、これまで必要とされていながらも見過ごされてきたことだったのではないだろうか。野球界では読売ジャイアンツに投手コーチとして復帰した桑田真澄氏やメジャーリーガーで活躍するダルビッシュ有選手、筒香嘉智選手をはじめ、少年野球のあり方、特に指導方法や大会のあり方について、スポーツ科学に基づいた理論的根拠を求めるなど、見直しを求める声は高まりつつある。それでもなお部活動においてスポ根主義が美談化されることは枚挙にいとまがない。

そのような状況下におけるCOVID-19の世界的蔓延は、多くの部活動に対し一斉停止という強制力が働く形となり、結果的に加熱した部活動のあり方を客観視し見つめ直すための冷却期間を与える1つのきっかけとなった。

それは運動部に限ったことではなく、文化部においても同様であった。第44回全国高等学校総合文化祭・高知大会は前例のないオンライン開催となり、競技かるたをはじめ、競技性のあるものについては中止

となった。各県の代表校が一堂に会することから「かるたの甲子園」とも呼ばれる、近江神宮を舞台とした全国高等学校かるた選手権大会（通称「高校選手権」）についても開催が見送られた。

競技かるたは「畳の上の格闘技」とも称されるほど激しいスポーツである。選手は1対1で畳の上に着座し、文字通り頭と頭を突き合わせ、その対戦時間は多くの場合1時間以上に渡る。全集中で読手が発する声に耳を傾け、上の句の数文字を聞き分けながら、下の句が書かれた札を激しく取り合う。団体戦では同じチームの選手同士で声を掛け合い、チームを鼓舞する。その一方で、外部の音を遮断すべく会場は締め切られ、観客は物音ひとつ立ててはならない。マンガ「ちはやふる」のブームに乗り競技人口は急増し、どこも会場は選手でいっぱいとなる。実に、競技かるたの会場は「三密」そのものである。この状況下において大会の開催が見送られることとなったのは、必然というほかない。

そんな折に非公認ながらも有志の競技かるた関係者によって開催されたのが「オンライン高校選手権」である。近江神宮における高校選手権の開催予定日であった7月26日（日）に、全世界から26校36チームがネット上に集結し、オンラインによる競技かるたの団体戦が行われた。競技かるたをどのようにオンラインで実施するかについての説明は割愛するが、競技かるたとは対面で実施するものという「常識」を超えた先に、オンライン高校選手権開催という発想が芽生え、大会の中止により失意の中にあった高校生たちには一筋の光が見出された。

とはいえ、やはり競技かるたというスポーツの魅力は、他の多くのスポーツ同様、選手同士が同じ空間で相まみえることにより、その技術や能力を競うことにある。昨年3月の一斉休校、更には長期間にわたる部活動自粛によるあおりを受けたのは、かるた部においても例外ではなかった。筆者が神奈川県内の有力校7

校を対象に調査をしたところ、部活動再開の時期は早いところでも6月末であった。更に練習再開当初は個人で行える練習のみに制限され、通常行われている対面による試合形式での練習を再開したのは、ほとんどの学校において9月に入ってからであった。関係者の話を総合すると、対戦を伴わない形での練習は、個々のモチベーションという点でも、部内の雰囲気という点でも負の要素が大きく、ストレスの溜まるものであったとのことである。

改めて、感染対策を講じた上での競技かるたのあり方とはどういうものであろうか。ここで競技かるた関係者は「常識を疑う」ことを求められたのであった。全日本かるた協会は、コロナ禍における「練習再開ガイドライン」ならびに「公認大会再開ガイドライン」を発表し、練習時や大会開催時に留意すべき点について周知した。

まず「三密」の中でも「密閉」については、適宜試合を中断した上での定期的な換気を行うか、常時窓を開放することで、その解消を試みることとなった。確かに競技かるたは試合開始から終了までインターバルを挟まないことが基本であり、試合の流れも重要視される。また音に敏感なスポーツであり、外界の音はできる限り遮断することが望ましい。しかし途中で中断をしたとしても、また試合中に外部の雑音が入り込んだとしても、その状況は選手全員にとって共通のものであり平等性が損なわれるものではない。中断も含めて試合の流れを掴むことや、読手の声のみに集中する力も実力のひとつと捉え直せば、「密閉」の解消は難しいことではなかった。

「密集」についても、練習会場や練習日を分散させることで解消を試みることとなった。全日本かるた協会のガイドラインでは、対面による練習再開時や大会開催の際は、1組（2名）につき6畳を使用することを目安として示した。この基準から逆算して、練習や大会における参加可能人数を割り出し、その範囲内で競技を行うこととなった。近年は競技人口の増加に伴い、限られた空間に無理やり選手を押し込むような状況が当たり前となり、その結果接触等によるけがのリスクも高まる状況にあった。しかしこのガイドラインに従うことで、改めて物理的にも安全な空間を確保することが可能となった。

最大の課題は「密接」の回避についてであった。オンライン競技かるたは、密接を完全に避けられるものではあったが、同時に「畳の上の格闘技」が持つ根本的な魅力を奪ってしまうものでもあった。競技かるた

が有する対面、至近距離での真剣勝負という魅力を失わずに、密接を回避する方法を見出すためには、やはり「常識」を疑わなければならない。濃厚接触者の定義の1つに「対面で互いに手を伸ばしたら届く距離（1m程度以内）で15分以上接触があった場合」というものがある。選手同士の接近回避が不可能であるならば、接触時間を短くするという方法で密接の解消を試みる必要がある。すなわちこれまで1時間以上かかることが当たり前であった1試合の時間を、15分程度に短縮することはできないだろうか。

その実現を目指すときに疑わなければならない常識は「競技かるたのルール」そのものである。選手は競技を開始する前に、裏返した100枚の札の中からそれぞれ25枚、両者合わせて50枚の札を選び（なお選ばれなかった50枚の札はその試合では使用しない）、自身が手に取った25枚の札を自陣内に3列で自由に配置する。その後15分間の暗記時間が与えられ、どの50枚が場にあり、どの50枚がないのか、またどの25枚が自陣にあり、どの25枚が敵陣にあるのかを暗記する。そして試合が始まると、読手は場がない50枚の札を含めた100首をランダムに読み上げる。この方法では、試合が始まる前の段階ですでに15分が経過し、競技の時間を含めると1時間以上は対面状態が続く。これを何とか15分以内に収められないだろうか。

例えば暗記時間では、両選手が札を並べ終えたら札の配置を撮影し、各選手が別々の場所で暗記をするという方法が考えられる。そして競技においては、札の枚数を減らし読む歌の数も減らす、という、ルールの根幹を変えることで1試合15分の実現を試みる事が出来る。高校選手権の団体戦で12回の優勝を誇る東京都の暁星中学・高等学校のかかるた部では、かねてから初心者指導の際に、決められた40枚の札のみを用い、各選手はその中から15枚を選んで並べ、対戦を行うという形をとっている。サッカーで言えばミニゲームにあたるこの練習方法には、実に様々な意図があるのだが、その1つに試合時間の短縮がある。このスタイルからヒントを得て、例えば100枚の札を25枚の4セットに分け、各陣に8枚ずつある状態から試合を行う、といった形にすれば、1試合15分という形が実現可能となる。このような「ミニ競技かるた」をスタンダード化することができれば、濃厚接触を回避することも可能となる。

これを普及させるには、全国規模でなくとも特定の地域においてミニ競技かるたの統一ルールを作成、周

知するとともに、ミニ競技かるた大会など選手にとって目標となるものが設定される必要がある。そしてこれはあくまでコロナ禍における競技かるたのあり方を追求した際の提案であるが、これを継続することで多様なかるた部のあり方を許容することも可能になる。すなわち、1試合に1時間以上を費やすスタイルは、特に初心者には負担が大きく、また競技かるたを楽しむためには、まず100首を覚えていることが前提となるため、スタート段階でのハードルが非常に高い。裾野を広げるためには、もっと手軽に始められ、また短時間で終わる対戦を繰り返せる形が望ましい。

その上で、必ずしも100首を用いた競技かるたにステップアップせず、このミニ競技かるたを楽しみ続けるという選択肢が残されていてもよいのではないか。競技かるたの「常識」、すなわち100首全てを用いるという方式に一元化せず、適用するルールを多様化することで、文化部としての競技かるたのあり方にも広がり生まれ、より多くの生徒が個々のニーズを満たす形で活動を継続することができる。

COVID-19の蔓延は、活動の自粛や大会の中止といった結果を招き、確かに様々なことを不可能にしまった。一方で「常識を疑う」機会も与えてくれたように思う。筆者の今回の提案は、現時点で実現しているわけではないが、部活動における競技かるたの1つのあり方として検討し得るものであろう。

コロナ禍が生み出した現状をチャンスと捉え、今こそ俗にいう「斜め上に行く」発想に目を向けるべきであろう。部活動が抱える様々な課題を見つめた時、今日ほど解決に向けて動き出すのに適した時期はない。より良い部活動のあり方を考えるにあたって、これまでの前例や常識を超える視点を持つことの重要性を強く訴えたいと思う。

コロナで僕も考えた

本郷 由希 (会社員)



2020 年は元日から我が愛するヴィッセル神戸が、天皇杯決勝で鹿島アントラーズに 2-0 で勝利して初タイトルを獲得。翌月 8 日のゼロックススーパーカップでは昨シーズンのリーグ王者である横浜 F・マリノスに両チーム合わせて 9 人が失敗する壮絶な (?) PK 戦の末に勝利。国内リーグ戦よりも先に開幕した 2 月 12 日の ACL のグループリーグ初戦では、ホーム御崎公園球技場でマレーシアのジョホール・ダルル・タクジムに生え抜き小川慶治朗のハットトリックを含む 5-1 で勝利、続く 2 月 19 日アウェイ水原三星ブルーウィングス戦では日本代表での活躍も期待されるニューエース古橋亨梧の終了間際のゴールで 1-0 で勝利 (アウェイでこの痺れる展開で勝点 3 はほんとに盛り上がりますね!)。2 月 23 日のリーグ開幕戦ではホーム・ノエビアスタジアム神戸で昇格組の横浜 FC に 1-1 で引き分けたものの、昨シーズンに続く躍進を期待するのに十分な滑り出しでした。

が、皆さんもご記憶の通り、新型コロナウイルスが徐々に世の中に影響を与え始めます。アウェイ水原戦もマスク着用と検温がスタジアム入場の条件でしたし、ホーム開幕戦では他のチームに先立ってスタジアムでの応援が禁止されていました。振り返ると、個人的に当時は応援禁止はやりすぎではないか感じていたものの、2 節以降の試合は延期になり、7 月のリーグ戦再開後しばらくして有観客試合になった後も、このスタイルが J リーグの標準型でした。再開以降、調子の戻らないヴィッセル神戸は恒例のシーズン中の監督交代を経て、ACL は初出場ベスト 4 という結果を残すものの、リーグ戦は通常のシーズンなら降格圏周辺の 14 位で終了、さらにはシーズン終了後には小川慶治朗を含む生え抜き 3 選手の退団に加え、1 年前に初タイトルを獲得したコーチ陣が根こそぎいなくなるというまさかの展開で 2021 シーズンを迎えることになりました。そして忘れてはならないことに、ジョホールの参加辞退に伴って慶治朗のハットトリックが公式

記録から削除されるというおまけつき。新シーズンを前にサポを辞めたくになりました (4 ヶ月ぶり 17 回目)。さらにさらに、急激に変化するヴィッセル神戸に対する心の疲れを癒すためにここ数年見に行っていた、隣町の JFL のチーム・武蔵野シティフットボールクラブは関東 1 部リーグ所属の文京区のチームと合併することが急に発表され、もうなんかいろいろと世の中の急激な変化について行くのが難しい今日この頃です。

さて、ここまで読んでくださった皆さんも、いったい何の話を読まされているのかとお思いですよ。ここからさらに僕の個人的な話を書き連ねる予定なのですが、文章の最後までには、2020 年 4 月からオンライン開催になって久しぶりに参加することができたサロン 2002 の話と絡めて着地させる予定なので、もうしばらくお付き合いください。特に専門分野のようなものがあるわけでもないですが、せっかくの機会をいただいたので、コロナ禍でいち個人が感じたことを書き留めておこうと思っています。うまくいけば、将来読み返したときに「この年はこんなことあったなあ」「あの頃はこんなことを考えていたんやなあ」と記憶を思い起こすきっかけになること、あわよくばどなたかにとってもそういったきっかけになることも淡く期待しています。

本郷家にとっての 2020 年は本来であれば、4 月から次男 (1 歳) が保育園入園・妻が復職の予定でしたが、緊急事態宣言に伴う臨時休園と区の登園自粛要請で、本格的な保育園通いが始まるのは 7 月からでした。それまでは長男 (4 歳) も保育園に通えず、妻は 6 月中旬まで育休期間を延長することになりました。僕は幸いリモートワークをしやすい職種、かつ職場の雰囲気ということもあり、3 月から週数回の在宅勤務を始めて、4 月からはほぼ在宅勤務の日々を過ごしていました。いま思えば家族との時間が増えてよかったなとも思えるものの、特に 6 月後半はいくら在宅勤務とは言え、幼児 2 人が家にいる状態で親が 2 人とも仕事

をするという、なかなか適応が難しい状況を経験しました。

ところで、皆さんはエコーチャンバー現象という言葉をご存知でしょうか。本来の意味は残響室のことで、自分と同じ意見の人たちばかりの中でコミュニケーションを繰り返すことで、自分の考えが増幅・固定化されていくことの比喩として使われます。特に SNS ではこの傾向が顕著で、ただでさえ自分の好みの合うものをフォローしていく中で、最新のレコメンドロジックも相まって「自分と好みの合う意見」ばかりを目にする環境が出来上がります。さらにはそれと相反する意見も、とても分かりやすい形にまとめられた（もしかするとそこまで先鋭化された意見はごく一部かもしれないにもかかわらず、反論しやすい「(想像上の) 理想的な」敵対意見が出来上がる）ものと認識しがちです。現代社会ではあらゆるところで「分断」が生じていると思っているのですが、それを生む・増強する要因の 1 つだと考えられています。コロナ禍になる前から、この「分断」は僕にとってモヤモヤと考え事をするときのトピックにはなっていたのですが、4 月からの在宅勤務で浮いた通勤と飲み会の時間から家族時間を引いてもなお残る時間がこのモヤモヤタイムに加算されたせいか、この「分断」がより大きく感じられるようになりました。

新型コロナウィルスに関しても、2020 年 4 月前後は 2021 年 1 月現在よりも「何が正解なのか」が分からない状況でした。それぞれが「正しい」と信じている情報も異なるし、そもそもの「考え方」が異なるので、お互いの「常識」がなかなか噛み合わない状況をいろいろな人間関係の中で形を変えて経験しました。些末な例でいくと、所属している草サッカーチームにおいて 2020 年 3 月頃に活動是非を相談する中で以下のような意見がありました（すごく単純化しています）。

A「グラウンド利用が禁止されていないのだから感染予防をしっかりと実施して活動すればよいのでは？」

B「世の中で様々な自粛が求められ初めている中で趣味の活動をするのはどうなのか？ 甲子園を目指す高校球児も練習をできていない時期ですよ。」

けっきょくこのタイミングでは深い議論はせず、いち企業のグラウンドを利用して活動していることもあり、不測の事態に備えて活動休止の判断をしました。「感染予防対策をしているか」よりも「結果的に感染したかどうか」で行動の是非が判断される風潮もあり、結果的に B の考えを取ってノーリスクな判断をしたこ

とになります。（その後しばらくして最初の緊急事態宣言があり、軒並み公営の運動施設も休止になったので結果的に良い判断だったのかもしれませんが。ちなみに、その後 2021 年 1 月の緊急事態宣言の頃にはチームとしての活動については発言者全員が A の意見で、あとは個々人が参加するしないを判断することになりました。）

そうこうモヤモヤしているうちにサロン 2002 の月例会がオンラインで再開されます。もう何年も参加できていなかったのですが、在宅勤務で時間の融通が利きやすくなっていたこともあって久しぶりの参加です。それぞれの立場でトピックは異なっても、考え方の基本的な部分は皆さんの中で共通しているのだなと感じたのが印象的でした。振り返ればここ数年ほとんど職場と家族という人間関係の中で生活していたので、新しい視点や議論が非常に刺激的でした。当時、自分のまわりではリスクを取らない判断が多い中で、自ら情報を集めて最大限できることをやりながら活動できる方法を考えるというスタンスには、「そうですね、これでいいんですよね」という共感と勇気をもらったのを覚えています。

自分と向き合う時間が増えたせいか、他にもいろいろと見るもの聞くものにいちいち感動したり考えさせられたりする 1 年を過ごしました。大坂なおみさんの全米オープン優勝は純粋に素晴らしいと思えましたし（「スポーツに政治を持ち込むな」という言葉を使って批判的に言及する人たちの多さにも驚きました）、全国のライブハウスが営業自粛で苦しむ中、自分が大好きなバンドの 1 つが先頭に立ってドネーションを立ち上げたこと、また何とかライブイベントを開催する方法を模索して実践した天衣無縫のレーベル主宰者がいたこと（彼はその後、新型コロナに感染し誹謗中傷の的になるのではないかと心配しましたが、そこまで有名でないせいか無事で安心しました）は誇らしいものでした。長男が所属するサッカークラブは独自の活動基準を設けて、政府の発表や世の中の雰囲気左右されずに活動休止期間を判断していて、こんな自律的な組織に子どもが所属できたことに安心感を持ってました（逆に年度の半分以上は活動できなかったことになりそうです）。スポーツを含むライブイベントが制約つきで再開された後、応援のできないスタジアムにはまだ違和感がありますが、ハードコアバンドの演奏を着席して拍手のみで観賞するというのは新鮮で想像よりもなかなか良いものでした（図らずも 1990 年代を中心に活動したニューヨークハードコアのバンドが実

践した方法に近いものが制約の中で再登場したと考えると面白くも感じました)。しばらく連絡を取っていなかった地元の友人がどうしているか心配で調べてみると、通販を始めていて微力ながら遠方から応援できたり（あまりにも突然だったせいか訝しがられたりもしましたが）、オンラインへのハードルが下がったのは、どちらかというと対面のコミュニケーションの方が好きな僕にとっても面白い変化をもたらしてくれました。近所のお店が開店後すぐに閉店になってしまったり、我慢して営業を続けていたお店も耐えきれずにととう閉店したりというわが町の様子に心を痛めつつも、毎日新しい変化や芽を感じています。

ここまでつらつらとごく私的な事柄や感想を書きましたが、すべて実は「コロナだから起こった」わけでもないのでは？と考えています。思えばヴィッセルに期待しては裏切られるのは毎年のことですし、2019年の武蔵野シティだって最終節を目前にしてJ3昇格への順位条件は満たせそうだったものの、スタジアムの収容定員を超えて入場者を入れないと観客動員の条件を満たせず（そもそも直前の試合で定員を超えていた…）、結果的に翌年以降のJ入会も断念していました。決して2020年の出来事が前代未聞に特別なことだったわけではありません。コロナ禍はいろんな問題を顕在化させたり、変化を速めたとは思いますが、何かが突如出現した！わけではないのかなと現時点では思っています。（もちろん、これら「不要不急」の事象と並べることはできない、人生を変えられてしまったような方々もいらっしゃるでしょうし、たまたまりモートワークに移行しやすいたまたま少し恵まれたラッキーな立場だからこんなほほんとしたことを書いていられるというのは理解しています。僕の拙文で気分を害する方がいらっしゃいませんように。）

想像以上にうまくまとめることができませんでした。字数と時間の兼ね合いでこのあたりで終わりにします。たぶん対面での会話やライブイベントが好きなのは変わらないと思うので「あの頃はよかったなあ」と振り返ることは止められそうにないですが、周回遅れでも新しい変化に適応して面白いことを見つけていけるような前向きな気持ちで日々を過ごしつつ、そしてこれからもサロン2002から新しい視点や勇気をもらいつつ、いつかは僕からも何かお返しができるように、お付き合いを重ねていければ幸いです。僕の拙文に最後までお付き合いくださった皆さんありがとうございました！

コロナの今、大きな羊を育てよう

小池 靖 (某日系食品メーカー海外事業部所属)



1. 二回目の緊急事態宣言

2021年に延長されたTOKYOオリンピック・パラリンピック2020(TOKYO2020)の開催まで半年を切った。1月も終わろうとしている今、首都圏を中心とした緊急事態宣言の延長で患者数の抑制を図ろうとしているが、その趨勢は予断を許さない状況だ。「完全な形で開催」の可能性は後退し、「安全な形で開催は可能か」「どんな形だったら開催が可能なのか」というような議論を耳にする機会がようやく増えてきた。昨年12月に諸外国でワクチン接種が始まったが、オリンピック候補選手が優先的に接種されるかということ、賛否は割れている。IOC委員から「東京五輪開催のために選手たちに新型コロナのワクチンを優先的に接種させるべきだ」との発言がある一方で、英国の元金メダリストは、「ワクチン接種は人道的な観点から、壮健なアスリートよりも重症化リスクの高い人を優先しなくてはいけない」等々。開催そのものがなくなるか、または大幅に規模が縮小された場合、TOKYO2020の意味は雲散霧消してしまうのだろうか。皆様がこの文章を目にされる頃には、すでに大会の趨勢は決しているものと推察するものの、小論ではこの点を考えてみたい。

2. 神への奉納

質問1. マキアベリはマキアベリストだったのか。

質問2. ケインズはケインジアンだったのか。

質問3. ハトはハト派なのか。

答えはすべてNO。

1と2はここでの主旨と異なるので、省略するが、ハトは争う相手が死ぬまで攻撃してしまうのに対し、オオカミは負けた相手の前に首が差し出されても決してトドメを刺すことはない、強い力を持った動物はそ

の力を制御する知恵を身に着けた、と。(本来ハト派とはタカ派との比較で穏健派と呼ばれるようになった経緯なので、オオカミと比較するのは筋違いながら、イメージは必ずしも実体を表さない)

質問4. オリンピック出場者はオリンピックなのか。

これはYES。理由はそれが定義だから。ところが、これを逆さまにして、「オリンピックはオリンピック出場者なのか」とすると、答えは変わってくる。オリンピックには、ギリシャ西部の古代オリンピックが開催された場所の住民もいれば、オリュンポス山に住むとされたゼウスを始めとした12の神々もいる。

紀元前8～9世紀頃、人々が戦災や疫病に苦しんでいた時代に古代オリンピックは始まった。4年に1度の競技祭は神々に捧げる儀式でもあった。1896年に始まった近代五輪は、第一回大会から20年で窮地に立たされる。第一次世界大戦、そしてスペイン風邪の流行と続いた。災禍を乗り越えて何とか実現したのが1920年のアントワープ五輪。(開会式では平和の象徴とされる鳩が初めて放たれた。)

質問5. 羊が大きいと美しい？

これも答えはYES。理由は「美」という漢字の組成そのものが示す通り。

質問6. 上記質問4と質問5の共通点は何か。

答えは、奉納。現代のオリンピックは世界平和を究極の目的としたスポーツの祭典だが、古代オリンピックはギリシアを中心にしたヘレニズム文化圏の宗教行事だった。4年に一度の競技祭は、全能の神ゼウスをはじめ多くの神々を崇めるための、神域における体育や芸術の競技祭だった。漢字は中華文化圏で育まれたものながら、大きな羊は神様へ捧げるものとして丸々と肥えた立派な姿であることが求められた。(余計なお世話ですが、中国語での美国はアメリカのこと。イ

メージが実体を表す事例であるとよいのですが)

3. 新型コロナとの共生

インフルエンザを例にとっても、予防接種が有力な対応策の一つではあってもそれで全てが解消する訳ではない。ワクチンが普及したとしても、After コロナは、Before コロナとは全く別世界になることは避けられない。Sports For Tomorrow のWEB サイトでは草の根にオリンピックの価値を届ける貴重な活動の数々が読み取れる。しかしながら、新型コロナの猛威に晒された世界は当時とは全く違う景色となってしまった。ひょっとしたら、30 を超えるスポーツ競技が同時期に同じ都市に一同に会してプレーをする、というモデルも変革を迫られるのかもしれない。

4. クーベルタンそして嘉納治五郎が目指したもの

近代オリンピックの父とされるピエール・ド・クーベルタンによって提唱された、「より速く、より高く、より強く」というオリンピックのモットーは、現在オリンピック憲章に次のような表現としてその根本原則が謳われている。(冒頭の3つのみ抜粋)

- 1) オリンピズムは人生哲学であり、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。
- 2) オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。
- 3) オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの諸価値に依って生きようとする全ての個人や団体による、IOC の最高権威のもとで行われる、計画され組織された普遍的かつ恒久的な活動である。それは五大洲にまたがるものである。またそれは世界中の競技者を一堂に集めて開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会で頂点に達する。そのシンボルは、互いに交わる五輪である。

ここから競技に関する部分を除いて、価値の本質に関連する部分のみを残して切り取ってみると以下のようになる；

- 1) オリンピズムは人生哲学であり、よい手本となる生き方の創造である。
- 2) オリンピズムの目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進すること。
- 3) オリンピック・ムーブメントは、普遍的かつ恒久的な活動である。

アジア初の IOC 委員となった嘉納治五郎は、身体とともに心を鍛え、そこで得たものを社会生活に応用していくことを目指した。クーベルタンは、ヨーロッパ文化の基礎であるヘレニズムが、アジアの洗練された文化・芸術と混じり合うことが大事だ、と幻のオリンピックとなった 1940 年の東京大会について手記を残した。そして美術史家の辻惟雄氏は、1 月 26 日付け日経新聞「私の履歴書」に以下のように記述している。

～模索し続けた「日本美術とは何だろう」というテーマによりやく答えをひとつ見いだした。きっかけになったのはオランダの歴史家、ヨハン・ホイジンガの名著「ホモ・ルーデンス」の一節だった。

「日本人の遊びについての考え方を、もっと詳しく規定していくと、おそらく今ここでなしうるよりもさらに深く、日本文化の神髄まで考察を進めることができるであろう」

目からウロコが落ちた。「遊びなんだ」とひらめいた。まじめさや厳しさといったイメージでくくられることが多い日本文化の根底には遊びの精神がある。～

5. 重ならない五つの輪を前にして

ここまでおさらいした通り、競技がなくなったからといって、オリンピズムには消し去ってしまうには余りにも“もったいない”崇高な理想が掲げられている。新型コロナとの共生というフィールドに於いて、スポーツ界がいかにしてこれら理念に則って社会の手本になるような生き方を創造できるか、が問われていることがわかる。TOKYO2020 での一部または全部の競技が開催できないような状況になったとしても開催都市を抱えた日本のスポーツ界は、世界に向けて、TOKYO2020 が育み目指そうとしたオリンピックの精神を世界に向けて改めて発信すべきではないか。市民社会での良き見本として「新常態」といかに対峙し、受容し、共生し、人間の尊厳を保持し、社会の安寧と平和に貢献しようとしたのか、それを高らかに宣言すべきではないのか。競技会の開催はもちろん重大事で

あるが、目指そうとしたのはその先にある理想的な社会の実現ではなかったのか。

「世界中の競技者を一堂に集めて開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会で頂点に達する」ことが叶わなければ、不完全燃焼ではあるだろう。期待が大きかった分、落胆もまた深い。しかし、重ならない五つの輪をじーとよく見つめてみよう。



たとえ離れ離れになっても、五つの輪が宇宙の彼方に飛散してしまった訳ではない。サロン 2002 が緊急事態宣言下のこの 1 月、長野県千曲市で実施した U-18 フットサルの全国大会のように、しっかりと大地に根を張ってそれぞれの輪の中で新型コロナを乗り越えようと必死に汗を流している仲間たちの声が聞こえてこないだろうか。活動の頂点に立つ競技会がなくなったからといってすべてがなくなってしまったと早とちりをしてはならない。また相まみえることができる日は必ず訪れる。モノには必ずヒビがある、しかし、そのヒビから差し込んでくる光は、明日への希望の光かもしれない。新型コロナは人類が「より速く、より高く、より強く」輝くためには、必要な試練なのかもしれない。いつの日にか、TOKYO2020 を振り返ってそのように語れることを祈って、TOKYO2020 にチャレンジしようとした私たちこそが豊かな社会を支える市民として、オリンピックに負けず劣らぬ真のオリンピズムの実践者だった、と言ってもらえるように、一人ひとりの心の深いところに大事にしている自らの羊を今は静かに、そしてやがて大きく育ててゆきたいものである。TOKYO2020 が残すべきレガシーはこれまでとは大きく趣を異にすることになるだろう。大会を開催するか否か、という矮小化された議論で終始してしまっただけではない。2013 年のブエノスアイレスの最終投票で惜しくも涙をのんだトルコの友人たち、そして日本に期待していた世界の友人たちのためにもここで足を止めるわけにはいかない。歩むべき道は長く、求められるものは深くそして尊い筈である。

追記；

- ✓ 2020 年 12 月 26 日（土）27 日（日）に筑波大学オリンピック教育プラットフォームが主催、サロン 2002 が共催者として名を連ね、日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させることを一つの目的として Online で開催された「クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2020」をオブザーバーとして拝聴させて頂き、高校生たちの真剣な議論に大いに触発されました。
- ✓ スポーツを通じて豊かな社会を実現することを目指すサロン 2002 の一会員の声としてここに記す。

以上